

I. 魚クラスターの構想とその展開

魚クラスターといっても魚だけではない。海の生きものすべてが対象である。このメインは政府出展の海洋生物園であるが、ひろい意味ではこの魚クラスター全体をよぶのにふさわしいネーミングでもある。

海の生きものと人びとの〈出あい場〉としてわれわれは魚クラスターをとらえた。与えられたクラスターテーマ〈海の生物を通して海に親しむ〉を実現するための体験の場であるということである。しかもなるべく理屈ぬきの出あい、いわば、〈原体験〉的な出あい場をつくりたい。そして個々の魚たちそのものよりも、魚たちの生活のすがた、なかまどうし、異種どうしのかかわりあいのようすに重点をおいて、〈生命環境としての海〉を感じとってもらい、その理解をたすけること。悠久の時間を生きぬいてきたわれわれの姿から、海の世界における〈適者生存〉のメッセージを読みとってもらうこと。それが魚クラスターの構想の基本となった考えかたである。

この考えかたにもとづいて、各館の構想が展開するわけであるが、その際、各館の展開のしかたが互いに補完的になるようにとの配慮もなされた。外国館については出展国ならびに出展内容の決定が、大幅におくれ、かつ内容についてコントロールすることができなかったが、構想段階では魚クラスターを構成する3つのパビリオンすなわち、住友館(民間館)、外国館、海洋生物園(政府出展)の役割りのうえでの補充関係はつぎのように認識されていた。

住友館	外国館	政府館
海の生きものとの出あい場		
海へ	海から	
太平洋	世界の海	日本近海
映像ならではの珍らしさ (擬似体験)	生きものならではの迫力 (直接体験)	
5面マルチ	小水槽	大水槽
自然の生態	珍魚奇魚	身近な魚の群泳

表1. 魚クラスター3館の役割分担(1) (構想段階)

外国館は最終的にはイラン館となり、チェコのデザイナーによる、映像を立体とした展示で、テーマは〈二つの海〉と決まった。したがって最終的には表1はつぎのようになったわけであるが、クラスター全体としてみるかぎり、基本的な

点では変わっていない。

魚クラスターの配置設計(以下魚クラスターの環境デザインとよぶ)は、以上のような基本的認識のうえに立って、〈出あい場〉を演出するための手段として展開するのである。

住友館	外国館	政府館
海の生きものとの出あい場		
海へ	海から	
太平洋	異国の海	日本近海
映像ならではの珍らしさ (擬似体験)	生きものとの迫力 (直接体験)	
5面マルチ	2面スクリーン	大水槽
自然の生態	2つの海	身近な魚の群泳

表2. 魚クラスター3館の役割分担(2) (実施段階)

II. 魚クラスターの計画、設計のしくみ

魚クラスターの環境デザインについて述べるまえに、計画ならびに設計のしくみについて、あらましを説明しておく必要がある。今回のクラスター方式は大阪万国博にはなかった新しい方式である。その方式のねらいは会場全体のマスタープランを担当したグループからの発言にまつとして、この方式が、魚クラスターにおいて、どのように解釈され、どのようにはたらいたか、またそこにどのような特殊条件が作用したかをふりかえてみよう。

魚クラスターのまとめ役として〈チェアマン〉が登場する。協会からの委嘱により、まずクラスターの配置基本設計をまとめる。これが会場計画委員会で撰択されて第II次会場計画マスタープランとなる。各館の設計は外構を含めてこれに基づいて進行するわけで、したがってそのあとにくるクラスター配置の実施設計は、各館の設計領域からはずれた部分の外構、修景、照明、ブリッジなどがその対象となり、受託者も各館の設計者のほかに各クラスター共通の修景、照明等の設計者を加えた設計JVとなる。

〈チェアマン〉の役割りは、設計者の異なる3館の間の〈調整〉をはかって、クラスター全体としてのまとまりと調和を生みだし、かつ全体の進行を円滑にすることにある。〈調整〉が望まれるのは、一つには〈構想〉について、二つには〈環境デザイン〉について、三つには〈工事〉について、四つには〈事後利用〉についてである。

〈構想〉については、さきに述べた通り、3館は比較的に補充的な関係にまとまったといえよう。これは政府館が、建設省による設計発注以前の段階で、通産省の政府館プロデューサー組織をつくって〈基本構想具体化業務報告書〉(通称基本構想)をまとめたのと、民間館の出展者である住友グループが住友館委員会をつくって企画をまとめたのと、ほぼ同時期であって、プロデューサー間に自主的調整が行なわれたことが大きな要因となっている。しかも政府館と住友館の展示プロデューサーをたまたま同一人が兼ねたこともつけ加えてお

こう。このように、構想についての調整はチェアマンとしての積極的活動の結果というより、チェアマンが政府館の総合プロデューサーと同一人であった事実がより重要で、この段階では政府館プロデューサーとしての活動の結果が、クラスターの構想の展開に寄与していたといえよう。

〈環境デザイン〉については、チェアマンによる〈調整〉というより、クラスターの配置基本設計がチェアマンを中心としてまとめられたことが最も重要で、〈調整〉はその後のフォローアップとして引きつがれてゆくのである。この配置基本設計は、チェアマンがさらに政府館の設計者をも兼ねていた事実を考えれば、各館の設計者による一種の自主調整の産物であったともいえる。事実、この段階で、クラスターの環境設計の方針については、各館の設計者のあいだにある共通の認識が成り立っており、各館の設計はこれをふまえたうえで、館ごとに独自の展開をみせると同時に、他館の設計の進行を横目で睨みながら、適宜フィードバックが行なわれた。かならずしもことばや会議によらないこの種の設計者間のフィードバックは“呼応”ともよぶべきもので、もとより各設計者間の意志の疎通が十分な土台の上に成り立っていることを前提とはしているが、今回のクラスター方式が生んだ一つの成果として評価できそうである。この〈呼応〉のようすは、各館におけるアーチの使いかたや、外構の材料の使いかたなどからうかがえるであろう。

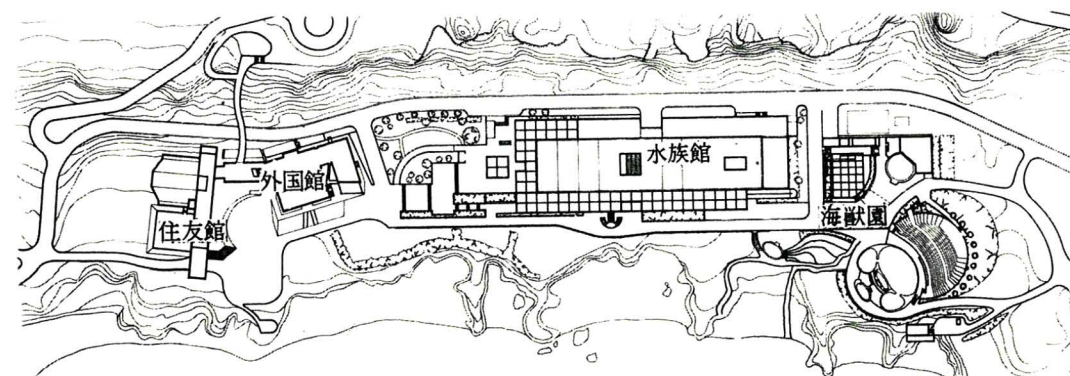
〈工事〉については、3館は同一大手業者を基幹とするJVにより施工された。同一であったことはチェアマンの調整の結果ではなく、会場建設と施工体制という、べつの土俵での事情によるが、このことが、工期、材料、労務その他困難の多いクラスター工事の調整を容易にしたことは事実である。

〈事後利用〉については、もとよりチェアマンの業務をこえた、より大きな土俵で、長い時間をかけて決まってゆくことである。しかし3館ともに恒久館という設定が当初からあったため、少なくとも、フィジカルな面からは事後利用の可能性を最大限に拡大しておく配慮から、魚クラスター全体が、レジャー施設であれ、研究施設であれ、単一の施設として機能する場合の想定も用意された。

III. 魚クラスターの環境デザイン

会場計画のマスタープランにより与えられていた条件として、3館の敷地割り、アプローチ、などのほか、原植生の保全、日かげの確保などがあった。

魚クラスターはサンゴ礁に面した海蝕崖に沿って長くのび



魚クラスター配置図

敷地で、海と反対側も緑の崖で区切られている。いいかえれば南北にのびた2本の緑のベルトにはさまれた台地である。このベルトを保全することが配置設計の基本となった。とくに海側には緑濃いフクギの群生が、ちょうどクラスターひろばのあたりにあり、これは工事中も特別の注意が払われた。現在、人工ビーチからみると、前とうしろの緑に包まれたクラスターのたたずまいは、博覧会というより、恒久施設としての落ちつきをみせている。

メインアプローチが崖上からであることは、魚クラスターの配置設計を規定する大きな要素となっている。崖上からブリッジで、崖下を走るサービス道路をまたぎ、外国館の屋上に至る。ここから住友館に直接入る動線、広場へおりの動線、広場へおりの動線、外国館へ入る動線等の仕分けが、外国館の形態と空間構成を基本的に決定した。

ブリッジは、配置設計JVの構成員であり、住友館の設計者でもあるグループの設計で、最終案に落ちつくまでには迂余曲折を経た。単に通行手段としての橋というだけでなく、魚クラスターへの導入部分としてのシンボル性を追求した結果である。実現への過程で、鋼材をはじめ、造型要素となった照明ボールの〈施設参加〉があった。

眺望という点からいうと、魚クラスターは地形上海へ向かって開いている。住友館の〈リニアコーア〉、つまり斜路を容してモニュメンタルに構えた方形部分の大きな壁面は魚クラスターの北側を閉ざして、その向うのエキスポランドの賑わいからクラスターを隔離させ、海への眺望の開放性を強めている。一方クラスターの南端ではいるかの国ショーパールの観覧席をまたぐ漁網のアーチがクラスターの他端の視覚的アンカーとなっている。日かげについても、魚クラスターではバラエティに富んでいる。住友館のリニアコーアはそれ自体待ち行列を容するシェルターである。外国館の屋上は営業参加のパラソルが賑わい、クラスター広場にはパイプとテントのシェルターが点在し、水族館はプレキャストのアーケードがアーチを連らねて、本館の巨体にヒューマンスケールを与えるとともに、建築的表現の主役となっている。いるかの国の広場にはメッシュを用いた藤棚式のシェルターがあり、ショーの観覧席には前述の漁網シェルターが魚クラスターらしい材質感を与えている。

アーチも各館それぞれに個性をもっており、外構の材料や植樹や照明やベンチなど、無理に統一をはかることなく、各館ごとに個性をもちながら、全体としての調和が意図されている。〈呼応〉によるデザインの自主調整の一つの例といえよう。(榎 総合計画事務所所長)